



先日、大和郡山の郡山城ホールで、語り舞台「日本神話への誘い」を見ました。女優の浅野温子さんが、古事記の神話を、弦とドラムスの神秘的な音楽をバックに語る一人舞台で、「幼い頃聞かされた古事記の神話を通して、日本人の豊かな心を次世代に語り伝えたい」と、浅野さんの言葉がパンフレットに紹介されていました。

演目は、「ヤマタのオロチ～スサノオの悔恨と成長」「大国主神と兄たち～愛する母との永別(因幡の白兔)」の二つ。

ヤマタのオロチ、古事記神話の代表的なお話で、誰でも馴染み深いものです。

乱暴が過ぎて、姉神のアマテラスから高天原を追放されたスサノオは、地上に降り立って、嘆き悲しんでいる老夫婦と一人の娘に出会う。そこで、ヤマタのオロチの話聞いたスサノオは、頭が八つもある恐ろしい怪物を、酒を飲み見事に退治して、その娘、櫛名田比売とメデタク結ばれる、そうでしたね。

ところで浅野さんの語りは、ドラマとして面白いように、古事記には無い部分を付け加えて、かなり劇的に脚色されています。

最初は、老夫婦がスサノオと出会う場面で、二人が娘たちを守るために、勇敢にもオロチと戦う姿が語られます。ただ泣いているばかりではいけない、家族を守るために、娘たちを守るために、父と母は戦わなくてはならない。生きるために戦わなくてはならない。いつの時代も親というものは子供たちのためなら、強くなれるし、大きくもなれる。しかし、何せ相手は頭が八つもある怪物で、しょせんは無駄な抵抗、あわやオロチに殺されそうになって、これを扉の陰から見ていた八人の娘のうちの一番上の娘が、けなげにもこう言うのです。

「オロチが欲しいのはこの私です。お父さん、お母さん、私が犠牲になりますから、妹たちを守って、幸せに暮らして下さい」。

こうして、毎年オロチがやってきて、七人の娘が犠牲になって、スサノオがやってきて、今度はヤマタのオロチがスサノオに退治されるんですが、ここで、意外な真実が明らかになる。実はオロチの八つの頭は、父と母と六人の子供たちの家族だったというんですね。

うーん、これは以外でしたね。オロチも家族のためにスサノオと戦うんですが、何せ相手は神様ですからね、今度はオロチがやっつけられる番で、父親の頭が最初に酒を飲んでやっつけられ、子供たちのオロチも次々に殺されて、最後に母親のオロチが残る。

ここでスサノオは「お前は見逃してやるから、これからは尼になって夫や子供たちの菩提を弔うがよい」などとは、言わない。古事記の神様には寛容という言葉は

無いんです。

「この母親が一番悪いんじゃないの、姉さんたちのカタキ、早く殺してしまつてよ、殺してくれないと、私、あなたのお嫁さんにならないわよ」とか、櫛名田比売に言われて、スサノオは、見事に八匹残らず退治してしまう　メデタシ、メデタシ、というわけで、古事記の神様の世界では常に力のあるものが正義なんです、浅野さんの古事記には滅び行くものへの悲しさ、愛が語られているように思うのですがどうでしょう。それにしても、ヤマタのオロチの八つの頭が、八人家族だったというのは驚きですね。



ところで、浅野さんの古事記の語りは、まるで巫女の神懸りを思わせるような激しい動きと、長い髪、それから独特のハスキーボイスが神秘的で呪術的な雰囲気漂わせて、不思議な雰囲気を漂わせています。まるで、古代の巫女、そう稗田阿礼を思わすような　。

古事記は西暦712年に成立した日本最古の歴史書で、稗田阿礼が記憶していた天皇の系譜や神話、伝承を太安万侶が聞き取って、漢文で筆記、纏めたものとされています。稗田阿礼というのは、古い神話や物語を語り伝えた人、特殊な霊力と記憶力を持った神に仕える語り部、そんな感じで、浅野さんの舞台もそんなイメージを意識して作られているようです。

ところが、古事記序文によると稗田阿礼は男だったようですね。

「時に舎人がいた。姓は稗田、名は阿礼、年は二十八。人となりは聡明で、一見ただけで、すぐ口ずさめ、一度聞いただけで、心に刻み付けて忘れない。そこで、阿礼に天皇の命令で帝皇日継(すめらみことのひつぎ)及び先代旧辞(さきつものふること)を誦み習わしめた」

天皇というのは天武天皇で、誦み習わしめたというのは、編纂された史書の読み方を覚えさせたということらしいです。で、天皇の死の後、30年の時を経て、太安万侶が、阿礼の協力で古事記編纂の事業を完成させたと序文は伝えているんです。

以前、NHKのFMで「オーディオドラマ 古事記」が放送されました。市川森一作、小六禮次郎音楽のラジオドラマで、全編4時間を越える超大作、出演者も石坂浩二、戸田恵子、江守徹といった豪華陣、古事記をドラマとして取り組んだ珍しい秀作で、古事記原文の歌謡の部分には曲がついていて、歌有り、音楽有りの一種のミュージカルようになっていました。

で、ここに登場する稗田阿礼は戸田恵子さん、もちろん女性です。

ドラマでは、阿礼は18歳、彼女が太安万侶に古事記の物語を語ることで物語が進行するんですが、安万侶は、もちろん石坂浩二さん。この時、安万侶はおそらく

初老に近い官人だったはずで、彼は阿礼の語りを聞いているうちに、昔、同じ名前の娘が居たことを思い出すんです。それは、まだ、彼が青年だった時、都がまだ明日香の地にあった時、彼は阿礼という娘に出会い、恋をし、しかしその恋は結ばれることはなく別れた。その娘が今、語り部として目の前にいる、それも昔の姿のまま。最初は半信半疑だった安万侶は、阿礼の語りを聞いているうちに確信するんです。目の前にいる阿礼は、昔出あって、愛した娘だったと

「阿礼、私は昔お前と出合ったことがある。30年前、私はまだ青年だった時、だが不思議なことに、お前はあの時のままだ」

「いいえ、私は安万侶様にお会いするのは始めてでございます。30年前に出会ったのは私の母でございます」

「なに、お前はあの阿礼の娘……、なるほど、それで顔が似ているというのか。いや、まだ私には信じられぬ。なぜならお前の語る物語は、あの時阿礼が私に聞かせてくれた話と寸分違わぬ。いくら親子といえどもこの膨大な物語を全く同じように語るとは考えられないではないか」

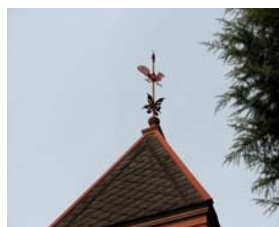
「はい、それこそは私と母が同じ親子であるという証拠。私ども稗田阿礼は先祖代々、母から娘へくふることぶみ>、すなわち古事記の物語を、ひとことの間違ひもなく語り伝えてまいったのでございます」

もちろん、これは平成の作家の創作だが、古事記序説も後世の創作だという説もあるし、もしかしたら、そうですよね、だから古代史は面白いんです。

稗田阿礼の出身地は今の和歌山県、それで、毎年和歌山県では「記憶力大会」が開かれます。もし、阿礼が抜群の記憶力を持っていたとしたら、それはやっぱり女だったかもしれないですね。そうでしょう、お宅の場合もとっくに忘れてしまった昔の約束を、しっかり覚えているのはやっぱり奥さんじゃないですか。

浅野温子さんの「日本神話への誘い」は、次は橿原神宮で公演があります。インターネットによると4月4日、それで、えっと、あれ、よく見ると脚本が、「阿村 礼子」と載っている。えっ、縮めて読むと阿礼さん？、千三百年前の、お宅が浅野さんの語りの台本を書かれていたんですか。

ラジオドラマは全部ではないんですが、録音をもっています。もし興味のある方があれば、声をかけて下さい。



2月14日 神戸 生田神社と裔神八社

神戸、穏やかな冬の日差し、日曜の朝・祈りの時間、坂道の町、バレンタイン、震災で立て替えられた礼拝堂、小さな服屋と小さな靴屋、ビルの谷間の地蔵菩薩、枯れかけている欒の木、青い屋根のむこうの海、荘厳なイスラム寺院、膨らみかけた梅の花、そんな風景の中を歩きました。

裔神八社では五男三女の太古の兄弟神が睦み会い、北野の異人街では異国の神々が睦みあい、関帝廟では旧の新年を祝う人たちが睦みあい、風見鶏の館の前の広場では大道芸を楽しむ家族連れが睦みあっていました。

海岸通りの洋館街ではミニスカたちが睦みあい、ルミナリエでは恋人たちが睦みあい、メリケン波止場では悲しい別れが睦みあい、三宮の駅ではJR・阪神・阪急電車が睦みあい、そして「割烹古里」ではポポアポコの人たちが睦み……あっていませんよね、みなさん食べるのに夢中で会長の話も聞いてなかったでしょう。

異人街のインド風のイスラム寺院の手前にあった大理石の建物は、ジャイナ教の教会で、「バグワン・マハビールスワミ・ジェイン寺院」だと教えて貰いました。

ジャイナ教は、不殺生、禁欲、苦行をもって知られるインドの宗教で、信者の方は主に真珠の輸出ビジネスに携わっている人たちです。僕達が通りかかった時はこの人たちの礼拝の時間で、日曜の午後は一般の日本人も中を見せて貰えます。

それから、関帝廟で色紙を炉にくべて燃やしている人がいましたが、あれは金紙といってお金が沢山儲かりますようにという願いで燃やすらしいです。炉は金炉といえます。金紙は関帝廟で売っていて、一束で70円。まあ、一束お願いしたら、700円ぐらいの馬券が取れるんじゃないですか。

風見鶏の館の前で「言葉売り」の青年を見ました。

彼はお客を捕まえたら、まず目と目を合わせて、それからおもむろに感じたことを感じたままの言葉で書きます。世界でひとつだけのオリジナル作業が彼の仕事。

「これまで以上に まわりに向けて 絵里子自身の胸にある想いを 表現していくことを意識して 笑顔とともにやっていく行動が 明日へと繋がっていくから」

彼の商品見本、うーん、何だろ、彼の客は悩める乙女がターゲットのようです。

「できない理由を 年齢のせいにした瞬間から 老いは始まる」

これも商品見本ですが、まあ、彼のターゲットには、昔乙女も入るようです。

そういえば、あなたも乙女のころに、一人の「言葉売り」から一つの言葉を買われたんじゃないですか。そう、人生という高い高い代金を支払って、プロポーズという言葉を

会社の乙女がくれるチョコは、職場のみんなで一箱なんです。やっぱりバレンタインのチョコは一人一箱がいいですね。でも彼女には高校生の子供さんもおられることだし、忙しいし、という訳で今日はいいい日でした。では、このへんで